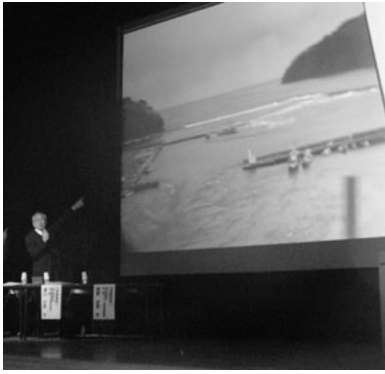


「津波でんでんこ」がつなぐ
地域の力―「地域福祉セミナー
やまと2012」開催報告

大和市社協では、市民・地区社協・民生委員児童委員・ボランティア等が集まり、福祉の現状を学び合う目的で、毎年、地域福祉セミナーを開催しています。

本年度は「東日本大震災から一年を振り返る」と題し、二月十八日、三百五十名を超える市民らが集い、災害に強い福祉のまちづくりに関する基調講演や、岩手県釜石市の活動報告・パネル展示、義援金募金を行いました。

活動報告では、はじめに釜石市社協の矢浦一衛事務局長が、ボランティアセンター運営や要援護者支援の取り組みを語りました。仮設住宅を訪問する生活支援相



「津波がどんなものか分かりますか。あれが第一波です」と白波を指す矢浦さん

談員について、「家族のもとに逝きたい。そんな思いを抱えた人たちを見守っている」と説明するなど、その報告は、遺族の抱える苦しみと、それを支え続ける難しさをうかがわせる内容でした。

「地域に住む一人暮らしの人を知っているあなたは、それを知りながら津波から逃げられますか。きつと逃げられないでしょう。それでも逃げてください」

矢浦さんのこの言葉は、次の報告者の釜石市鶴住居地域振興協議

会の浦山文男会長に引き継がれます。海に面する鶴住居地区は、過去の津波で子どもの一割が犠牲になつたことがあり、助かる人から助ける人をつくらうと、小・中学生と協働で防災を進めていました。

しかし、釜石市の東日本大震災の犠牲者のうち、半数以上は鶴住居地区の住民でした。備蓄のあつた二次避難所が全滅したため、浦山さんは住民と四キロの山道を越



「まずは自分と家族の命を守って。そこから」と矢浦さん



「防災は命を守るボランティアと繰り返し伝える」と繰り返す浦山さん

え、暗闇のトンネルを伝い歩き、たどり着いた避難所で新聞紙にくるまって眠ったと報告し、「この経験は、子どもの心の深いところに残っている」と、心のケアの課題を伝えました。

「助けたい人のために、まず自分が助かる。それは地域の信頼関係があるからできること。子どもは学校が避難させてくれるとか、そういった安心感を地域の中で持つこと。そうして一人ひとりが逃げる準備をきちんと整えていくこと。防災は命を守るボランティアではないか」と投げかけました。続いて、釜石市甲子地区民生委員児童委員協議会の東野武美会長からは、日常的な連携と情報の重要性が確認されました。

甲子地区は海から七キロ離れた津波被害の少ない地域で、現在、十カ所五百四十五戸（入居率九五％）の仮設住宅があります。

一方で在宅被災世帯は百四



「民生委員一人では、一人分の仕事しかできない」と東野さん

り、情報量や支援内容の不公平さを感じる声も上がっていると言います。地区民児協では、四月から在宅被災者の調査を始めたものの、個人情報保護法のため、基本情報が少ない中で戸別訪問を続けています。情報を安心して共有できる信頼関係をどのように育んでいくか、東野さんの報告から、地域づくりの課題が示唆されました。そのとき周りにいる人と一生懸命逃げなさい。

岩手県に伝わる「津波でんでんこ」の教えは、地域の未来を守るうという強い思いと、日ごろから培われた信頼関係によって支えられてきました。

活動報告を受け、大和市社協は「われわれの街を守るしくみを、これからも皆さんと一緒につくっていききたい。それが登壇された皆さんへの恩返しでもある」と、セミナーを締めくくりました。

（企画調整・情報提供担当）